

モンゴル通信

NO.15



モンゴル帝国の首都があったところ。今は何にもありません。

ものを残さない民族

旅の終盤、ウブルハンガイ県のハラホリン村に立ち寄りました。そこは、かつてカラコルムと呼ばれたモンゴル帝国の首都があったとは思えないほど、何にもないところでした。

ハラホリンには、日本政府の援助により2011年に開館した国立博物館があり、展示制作や資料保存など、博物館や文化財に関わることを専門とする文化財保護の協力隊員が派遣されています。

案内してくれたその隊員は「博物館は、読み書き文化のヨーロッパから発生したもので、モンゴルの口承の文化とは真逆のもの。修復・保存の概念と技術が根付くには、まだまだ時間がかかるだろう。」と話しました。

かつての首都があった草原は、まさに『夏草や兵どもが夢の跡』の世界でした。

旅で出会った遊牧民

旅行中、雨に降られてテントを張るのが難しい日がありました。ドライバーさんが「ウランバートルからウムヌゴビを回って旅しています。一晩泊めてもらえませんか。」とお願いしに行ったのは遊牧民のゲル。おばちゃんは馬乳酒をかき混ぜながら「いいよ。」と二つ返事で承諾してくれました。

二つのゲルを持つ二世帯の家族は、一つのゲルを私たちに使わせてくれました。それだけでなく、スーテーツアイ（ミルクティー）やホーショール（大きな揚げ餃子）を振る舞ってくれ、雨にあたって寒いだろうとかまどに火を起こしてくれました。一緒に食事をして、おしゃべりして、結局二晩もお世話になりました。もし日本で自分の家に外国人が10人も泊めてと来たら、同じようにできるでしょうか...

また別の夜。ゲルの近くにテントを張ったところ、そのゲルの男の子が馬頭琴とホーミー（喉歌といわれる歌唱法）の演奏を聴かせてくれました。習い始めて二年、練習時間は一日6時間。普段は街で寮生活をしている、素朴な笑顔の高校生。夏休みのため実家のゲルに帰省中。幸運な出会いでした。



馬頭琴を演奏してくれた高校生の男の子

何にもないけど何でもある

今回の旅、十分な水や風呂、トイレ、電気、電波はありませんでした。しかし、草原があって砂漠があり、砂丘があって山と川があり、森林があって湖があって、赤茶けた大きな岩もありました。暖かい心を持つ遊牧民が暮らすゲルがあって、羊と山羊、馬に牛にラクダにヤクもいて、家畜の糞は、私たちに火の暖かさをくれました。枯れ地にも木が育ち、小さな花が咲くことを知りました。野生のトカゲや鳴きうさぎは、心を和ませてくれました。人工の灯りが何一つない夜の大地に寝そべれば、満天の星空と天の川、流れ星に包まれました。何て幸せなんでしょう！

モンゴルって、何でもあるすごいところ。そんな旅をさせてもらえたことに感謝です。（冨井愛）

